

なくなつた結果、之が廢止の策が決定した時に當つても、其の實行は極めて容易であり、河南の編入には何等の故障を見なかつた。金の漢人利用の政策はこゝに至つて完全に奏功したと言ひ得るだらう。

本篇は以上八年に亘る齊國の置廢を中心として金國の中原經營の經過を説き之を繞る金宋兩國の交渉を軍事的・政治的に明かにした純然たる政治史外交史である。著者が此の從來究明に缺くる所あつた齊國を採りあげ個々の歴史事實を詳細に考證した旁に對しては十二分の敬意を拂はなければならぬ。只全體を通じて平面的な感なき能はざる憾はあるも之とても此種政治史の持つ性質として責む可きに當らぬだらう。とまれ現今新しい意味に於て政治史が強調せられる際、本篇は讀者に對へる所あるを思ふものである。

以上本論叢に收むる各論四篇、各、研究對象を限られた滿洲史に求めつゝも而も獨目の觀點に立つて其のバリエテを失ふ事なく、夫々の専門分野よりする鋭き論說に其の深き考察を認めしめる。望むらくは今後蒙古史關係の研究を合せて「滿蒙史」の實を充されたい。(四六倍版三二二頁、挿圖二、附録——參考滿支要圖、昭和十三年八月發行)〔愛宕松男〕

列強現勢史・ドイツ

大類 仲著

祖國を愛する眞情發露の仕方は素より千差萬別であらう。然し

歴史家に課せられたる何よりの表現法は、古よりの祖國の歴史を正しく認識把握解釋し、其を正しき姿の儘に傳へる事である。斯る態度は、祖國以外の國の歴史を探究せんとする者にとつても亦要請せられねばならない處のものであつて、殊に其國が祖國と密接親善なる關係にある場合には斯る立場こそ尙嚴として守られねばならないであらう。祖國の歴史を科學的に認識せんとせざる者は祖國を愛せざる如く、諸外國の歴史を眞の姿の儘に理解せんとせざる者は其國に對し侮辱をなすに等しいからである。盟邦ドイツの歴史を究明せんとする者にも、此國が盟邦なるが故に愈々斯る立場に立脚する事が要求せられるであらう。盟邦なるが故に、其歴史が展開し又現に内包しつゝある幾多の相剋矛盾の姿も亦正しく理解し述べられねばならないのである。

顧みれば、嘗て吾々が何人と雖も一應ドイツ史に關心を抱いたのは、歴史の世紀と謂はるゝ十九世紀にドイツ史學が文字通りの最高峯に達し其が吾々に啓示する處のもの多大であつた爲でもあつたが、又吾國の歴史的發展がドイツの其に相類似する處のもの多々あると信ぜられたからでもある。兩者相通じて特殊なる發展の跡を辿る事多かつたが故に、凡そ歴史に於ける普遍と特殊の問題解決を迫られてゐる者にとつては、ドイツ史に對する解明はイギリス・フランス史等の其と共に不可缺とされたからである。特に此場合十八世紀末以降幾十年のドイツ史との比較研究に主として注がれた事は、今尙左程古き前の事とは思はれないが、然し現在、ドイツ史に對する關心は寧ろ斯る時代を既に揚棄して現在

脈々たる生命をたゞへ動きつゝあるドイツの姿に對し向けられる様である。今日のドイツは其程に其繰展げる様相が多彩であり華かであり、又幾多の問題を陸續として呈示するからであらう。

凡そ現に展開の過程の中にあつて今尙一應の完了さへ見ざるものに對する把握は其困難なる事言ふ迄もないが、而も尙本書は吾々の斯る要望に應へん爲現代世界史の一大指導勢力、強力なる推進力となる現在ドイツの姿を傳へんと草せられたものであつて、其筆は遠くドイツ的なるものゝ構成され初めたるゲルマン民族の大移動より起されつゝあるとは謂へ、現在ドイツの基礎はビスマルクのドイツ帝國建設に依て築かれたとの見解の下に其論述此頃より詳細になされ、第一編ビスマルクよりヒットラーへ、第二編ヒットラー治下のドイツ——此等二編は主として其政治外交社會經濟史の解明にあてられてゐる——が本書の主要部面を占めてゐるのは當然であるが、而も著者は良く斯る困難の數々を克服せられ啓蒙的役割を演ぜんと意圖は略々達成せられたかの如くである。是は現代ドイツの動向に對する絶えざる最大の關心と細心の注意なくしては不可能なる事であつて、現代世界史を創造す可き一人として生命を享受し乍ら兎角過ぎ去りしものゝみへの研究に名を藉り現實の苦惱より逃避し勝ちなる吾々への警鐘とも謂へやうが、就中私が著者に敬意を表さざるを得ないのは、著者のドイツ現勢史把握解明に對する飽迄嚴正眞摯なる態度に對してである。

即ち、ビスマルクに依て統一せられたるドイツ帝國と雖も決し

て理想的なるものではなく(三七頁以下)又その政治と雖も、外交工作に比類なき手腕を發揮したとは謂へ内治は必ずしも成功的とは言へない(四六頁以下)として所謂鐵血宰相の業績に就いても飽迄批判的であらうとせられた其炯眼は、幻惑的英雄ヒットラーの行動理解に際しても依然たる光を保ち「ナチスが右翼政黨を遙に凌駕して勢力を増大して來た所以のものは、彼等は之等のものと全く異なる獨自の社會主義的政綱を持ち、それが主として都市の中産階級と地方の農民の心を深く把へたからに外ならない(一七〇頁以下)、然し階級の前に國家を重んじ政權獲得後最初の仕事を共產黨彈壓とした(一七六頁以下)ナチスには社會主義的色彩はなくなり(一八八頁)間もなく「有力な資本家もナチスを支持する様になつて來た(一七二頁)」とナチス政權の立脚する處を分析し、所謂 Ganzismus も眞に全體を包括し得ず、従つて其外交は頗る鮮にして成功的なるに比し(二〇六頁以下)内治に於ては、從來掲げたるスローガンは實行されないものが多く(二三三頁)未曾有の躍進を遂げたる經濟界の繁榮と雖も「産業界の自然的な景氣回復によつてではなく、専ら政府の人爲的政策によつて成つたもの(二七九頁)」であり「現在の彼等の状態が彼等にとつて最善のものであるか否かについては尙時日の經過を俟たねばならない(三七〇頁)」と論斷せられるが如きは僅に其一例に過ぎない。

實に著者の立場は主として最近約半世紀間のドイツ史を飽迄科學的に如實に解明せられる事にあつたのであつて、正しく斯る立場こそ盲目的ドイツ禮讃者とは本質的に異り、ドイツを眞に愛し

ドイツの儼として動かし難き歴史に敬意を表する正しき歴史家の立場であると謂はねばならないであらう。

第三編はドイツ精神文化の概観にあてられ、ナチス文化に關する可成り多方面の紹介もされてゐるが、現在ドイツに於ける狹義の文化は今尙形成途上にあつて、古典時代以降の謂はゞ過去の文化が依然絢爛たる光を放つてゐるの感が深い。

兎もあれ本書は僅にポケット版約四〇〇頁の中に論述せられたるドイツの現勢史に對する啓蒙的著述ではあるが、私は、ドイツ及びドイツ史を敬愛するが故にこそ飽迄其正しき把握と解明に努められんとした著者及び夙にドイツ近世史の研究に専念され今茲に著者の協力者となられた林健太郎氏に對し敬意を表し度い。近く同じ著者に依り列強現勢史・ロシアの刊行ありと聞く。本書を讀み此近き刊行を待つ者私だけではあるまい。(富山房百科文庫第九冊、現代ドイツ統計主要一般參考書、人名索引收録、定價八拾錢)〔西井克己〕

G. Dykmans, La Vie Economique sous

l'Ancien Empire. Paris 1936

C. Dykmans, L'Organisation Sociale sous

l'Ancien Empire. Paris

右二著は共に Histoire Economique et Sociale de l'Ancienne l'Empire に屬し、その第二卷、第三卷をなすものである。第一卷は Des Origines aux Thinites. Paris 1935 と稱せられ夫々相關聯する

所があるが如きも偶目の機會が未だ與へられぬのは遺憾である。先づ注意すべきは著者はリエージュ大學の商學博士、國民經濟・社會經濟の大家たる事である。従ひて、埃及學者乃至一般史學者とその立場に於て異なる點である。

第二卷は本文二九六頁、年代をとき、農業・牧畜漁獵・不動産及び地方民、鑛山・石切場・工業、企業組織と勞働者の狀態、物資の循環、結論より成つて居る。各章に於て示唆に富む記述が多いが、原始的産業につき從來、埃及學者の説く所に一步進めたる事、他、金屬の使用につき特に社會情勢と關聯して説きたる事、宮廷御用の工房の特別なる組織に推定を立てたる事、海上交通にしても、地中海に於て消極的なるも、紅海に於て積極的なる事を示して居る。

第三卷は本文二四七頁、先づ Thinites の王朝の王政確立をとき、次に第三・第四王朝に當る Memphites の大造營者の時代、第五王朝の冥頭政治の發生を擧げ、最後に第六王朝の封建制度の近接を以て終つて居る。社會地理學の立場も説かれて居り、社會學的なる解釋が餘程強いやうに見受けられた。就中、Visit の生活を吟味し、地方の政治情勢の變遷に鋭い觀察を加へ、Imira Nout Mout「新市の支配者に就きての徹底せる解決を與へむとした努力は敬服すべきものがある。

由來、社會學者・經濟學者が古代埃及を觀る場合に稍もすれば彼等の持てる立場より律せむとする事が屢々あつて、一見解として尤もながら、その間に重要な事實を等閑に附せる機がないで